

大分県立看護科学大学 第4回看護国際フォーラム

看護研究の方法としての質的研究: グラウンデッド・セオリー

桜井 礼子 Reiko Sakurai

大分県立看護科学大学 広域看護学講座 保健管理学 Oita University of Nursing and Health Sciences

2003年3月17日投稿, 2003年5月6日受理

キーワード

グラウンデッド・セオリー、質的研究、概念、カテゴリー、現象、理論

Key words

Grounded Theory, qualitative research, concept, categories, phenomena, theory

1. はじめに

「看護の質的研究 - グラウンデッド・セオリーを中心に」のテーマの下で、大分県立看護科学大学の第4回看護国際フォーラムが平成14年11月23日に大学の講堂で開催された。看護の質的研究に取り組みはじめた、あるいは、取り組んでみたいと考えている看護職者のために、看護の質的研究の基本を理解していただくことを目的に本フォーラムが企画された。本稿では、本フォーラムを通して、グラウンデッド・セオリーの方法論について学んだことなどについて紹介する。

2. 講演と総合討論の概要

フォーラムでは、アルバータ大学質的方法国際研究所(International Institute for Qualitative Methodology, University of Alberta, Alberta, Canada)のジュリエット・コービン(Juliet Corbin)先生「A General Overview of Grounded Theory Methodology, Recent Updates, and Implications of the Method for Nursing」と、東京都立保健科学大学の戈木クレイグヒル滋子先生「グラウンデッド・セオリーの看護研究への適用の実際」のお二人の講演、質疑応答を中心とした総合討論が行われた。

コービン先生は、グラウンデッド・セオリーの開発、発展に深く関わられたアンセルム・ストラウス(Anselm Strauss)先生と研究に従事され、現在、グラウンデッド・セオリーの第一人者である。戈木先生もス

トラウス先生のもとでグラウンデッド・セオリーを学ばれ、小児看護の領域において、精力的に質的研究を実践しておられる。

コービン先生は、看護における理論の重要性、グラウンデッド・セオリーの方法論の概要、利用の際のテクニックや重要な要素などを紹介され、さらに、最近のグラウンデッド・セオリーの発展状況、看護実践、研究、教育における方法論としての意義についてお話された。

戈木先生は、実際の事例をもとに、データから概念を抽出しカテゴリーを導き出す過程、およびカテゴリーから理論へと発展させる過程について説明された。また、看護研究に関して「研究は新しい発見であること」「看護の研究の目標は、看護実践の向上につながるような研究成果を積み上げていくこと」であり、「ひとつの研究は非常に小さなものであるが、それを組み立てて積み上げていかないと意味のある集合体にはならない」「時間は有限であり、研究の結果をいかに臨床に還元していくかが大切である」など研究に関する示唆に富む考え方を提示された。

総合討論は、会場から質問をうけ、それに解答するかたちで進められ、質問に対して具体的な事例を用いて説明していただき、お二人の講演の内容を補完する形となり、聴衆の理解を助ける結果となった。

「指導者が近くにいらない環境で質的研究をすすめていくにはどうしたらいいか」との質問に対しては、

グループで研究をすすめること、また、やはり適宜指導者にアドバイスを受けることが必要であると聴衆のこれからの研究の方向を示された。

3. グラウンデッド・セオリー方法論について

(1) グラウンデッド・セオリーとは

1960年代に、社会学者、グレイザーとスト劳斯によって、質的データを分析する方法論として開発された方法で、フィールドスタディを用いて収集したデータの比較分析をもとに理論の構築を目指すものである。コービン先生は、「看護師が看護介入をしようとするときには、理論に基づく知識を持ち最善のやり方で対処する基盤を獲得することにより、最善のケアを行うことができる」とし、理論が看護にとって極めて重要であることを強調された。「グラウンデッド・セオリーは、看護に関わるさまざまな現象について、人の反応のパターンを知ることであり、単に概念だけで終わらず、それを理論構築することである」と述べられた。

グラウンデッド・セオリーでは、個人の知覚と、個人をとりまく環境、およびそれらとの相互作用の過程に焦点を当て、その心理・社会的現象を共通した概念として明らかにしていくことを目的としている。人間の反応のパターンを質的研究によって解明するには、初めの段階で研究を構造化せずに取り組みることが必要である。グラウンデッド・セオリーという方法論は、その名前が示すように、研究者があらかじめ設定した仮説から結果が生まれるのではなく、データに基づいて発見されるものである。すなわち、対象者から提供された情報により理論が構築され、理論は研究者と対象者が共同構築するもので、グラウンデッド・セオリーはデータとの対話であることを強調された。

(2) グラウンデッド・セオリーの方法論の過程

グラウンデッド・セオリーの方法論の特徴の一つは、データを分析していく過程で常にデータとの対話が重要とされることである。データから帰納的に概念、カテゴリーが導き出されると同時に、データから形作られつつある概念、カテゴリーに対して、さらにデータを収集し検証するという過程が繰り返し行われていく。看護の質的研究にグラウンデッド・セオリーが用いられる理由の一つは、体系化したデータ収集から理論構築までの一連の手順やツールが細かく明示されているからではないかと考える。したがって、その手順をきちんと経ることにより、よりよい研究結果を

得ることができると思う。

本稿では、グラウンデッド・セオリーの方法論すべてを説明することはできないので、データの収集、データ分析のプロセスの手順とツールについてまとめる。

i) データ収集

質的研究においては、インタビュー、観察、伝記のような記録物など様々なものからデータが収集される。データ収集の方法は、研究のテーマによって決定される。研究テーマを設定する時点で、明らかにしたい「現象」を明確にする必要がある。質的研究では、その現象について研究されていない問題に着目するので、目的と研究成果がどこにあるのか、どうしたら見つかるのか、研究の初めには簡単にはわからないことも多く、データ収集と分析が繰り返される。

ii) データの分析

データの分析は次の4つの段階で行われる。1) データを丹念に読み込むこと、2) 下位の概念を見出し、ラベリングをすること、3) 見出した下位の概念をカテゴリーに分類し上位概念を構成すること、4) カテゴリー同士の関係を統合して理論を構築すること、である。理論は、概念を整理し統合し、概念の間にある関係を解明することにより形成されるので、理論構築には概念が重要である。

データ分析は、丹念にデータを読み込むことから始められ、一つの言語、文節、文章といった中から重要な要素を見つけて、下位の概念として名前をつけること(ラベリングという)を行う。次に見出した下位の概念をグループにわけ、上位概念=カテゴリーをつくりあげる。ここで重要なことは、概念は自動的に浮かび上がってくるものではなく、研究者がその重要性を理解し認識していなければ気づかずにおわってしまう。研究者とデータとの間の相互作用によって概念化するには、理論的な感受性が必要であり、感受性を持つことによってデータのもつ本当の意味をつかむことができる。

次のステップは、「properties (特性)」と「dimensions (次元)」を用いてカテゴリーを発展させることである。特性は、概念やカテゴリーが「どのような」ものであるかその特質を表し、説明するものである。次元とは、各特性がとりうる多様性の範囲を示し、カテゴリーに特異性と理論的に多様性を与えるものである。特性と次元により、カテゴリーに特異性を持たせ、他のカテゴリーと差別化する。データを多く集めるほ

ど、特性が増え、次元にもさまざまなバリエーションが現れてくる。「variation バリエーション」が大きくなればなるほど、また、「process プロセス」を取り込むことにより、多様な現実をつかみとることができ、一般的なパターンが見えるようになり、それを理論に投影することができる。データ収集、分析は新しい概念、特性、次元がデータから現れない「saturation 飽和」する状態まで続けられる。飽和の状態に達しないままデータ収集をやめてしまった場合には、あまり発展していないカテゴリーしかなく、不十分な理論しか構築できないことになる。

分析の最終段階で、研究者は、カテゴリーという、より高いレベル、抽象度の高い概念から、カテゴリー同士の関係によってストーリーを組立て、理論を立ち上げる。すべてのデータに対して一つの理論をもたらすようにそれぞれのカテゴリーの相互の関係を解明しなければならない。この段階は、想像力と強力な知力を必要とするきわめて困難な課題であることは、コービン先生が「統合レベルに達することは、自分を信用することであり、また勇気をもってリスクを冒すことであり、非常に困難な作業である」とも述べていることから明らかである。また、「その善し悪しはデータが示してくれる」と述べ、データの重要性が強調されている。

iii) 分析をスムーズにするためのツール

データの分析の段階でとくに重要なことは、比較すること、思考を刺激するような問いを発することである。「constant comparison 絶えざる比較」をすることで、概念を引き出し、特性、次元を増やすことができる。自分の経験、イメージできるものと比較した場合、本当にこの状況に適應するものかどうかということデータを裏付けすることが大切である。また、分析の結果、出現しつつある概念を基にして次のサンプリングとデータ収集をおこなう「theoretical sampling 理論的サンプリング」が特性や次元、概念間の関係に対する知識を拡張し、次元の範囲や多様な状況を一般化するために重要である。さらに、データの分析において、思考過程を示し、変化し進化する理論を追跡する上で、「memos メモ」を残すことが重要になる。特に質的研究では、その分析過程を明確にしておき、データとの確認作業を行うことが大切であり、メモはそのための重要な手段である。特に共同研究者がいる場合や、論文を書く場合にも非常に有用なものとなる。その他に、「theoretical comparisons 理論的な比較」、「paradigm パラダイム」、「conditions matrix 条件

的マトリックス」などのツールが示された。このようなさまざまなツールを使いこなすことが、良好な結果を導き出すために重要である。

iv) 分析力を高めること

質的研究において、良い分析ができるかどうかは、研究者個人の資質に関わっている。研究者の資質として、創造性と、厳密さと、確固たる忍耐力と分析者の理論的感受性が必要である。理論的感受性とは、洞察力、理解力、データに意味を与える能力、適正を判断できる能力とデータに対する鋭敏な意識などを指す。この理論的感受性を高める要因として、臨床の看護師がもつ専門的知識、職業上の経験、個人的な経験などがある。しかし、時には職業上の経験が、日常的で当たり前の出来事を観察することを阻害することもある。

分析力を高めるためには、分析プロセスを数多く体験することである。現象に対する洞察力や理解力は、データとの相互作用にしたがって豊かなものとなる。また、研究者が客観性をもつためには、自分のバイアスを意識することも必要である。データと向き合い、分析を行い、そこに他者の意見を取り入れたり、指導者によってトレーニングをうけることによって、その力は増強される。

v) 結果の報告

研究結果を報告することは極めて重要である。一つひとつの研究は小さなものであっても、それを積み重ねることによって、発展していくからである。質的研究では、結果を得るまでの過程を示し、結果を明示することが必要である。専門誌では十分なボリュームが与えられない場合が多く、到達した結論を要約しただけでは、なぜこのような結果となったのか、なぜこのような理論にいたったかがわからず、主観的、曖昧といった批判となるからである。研究方法論が曖昧な研究成果は、実践に還元したり、第三者がそれを活用しようとしたとき、また、その研究をさらに発展させようとしたとき、活用できないものになってしまう。他の研究者がその理論を使えるようにするためにも、結果に至る過程を明示することは重要である。

(3) グラウンデッド・セオリーの方法論の限界

グラウンデッド・セオリーの欠点として1) 理論開発に時間がかかること、2) 理論をどのように統合していくかは、研究が終わるまでわからない場合があること、3) グラウンデッド・セオリーは独学することは難しい。すなわち、研究者が指導者と一緒に勉強し、研

究の過程でフィードバックが得られる場合に、最良の結果が得られること、4) 多くの人に一般化して当てはめることはできないこと。ただし、統合カテゴリーが十分広いものであれば、研究を進めて一般的理論までもっていくことができる。5) グラウンデッド・セオリーは、関係のある変数とか、その関係を確認することができるが、その関係の強さを決めることはできないこと、などがある。

質的研究の方法論においては、様々なシステムとしてその手順や方法は示されているが、系統的な分析方法としては認められず、妥当性や再現性という視点から、研究結果について、主観的、曖昧といった批判をされることがある。しかし、これは質的研究から得られる新たな知見の大きさによって、相殺されるものである。

4. 質的研究をすすめていくために

コービン先生は、「看護は科学であると同時にアートである。科学としてのエビデンスは、定量的な研究を通して集めることができる。しかし、看護の本質は、触れたり、思いやったり、優しくそこにいたり、インスピレーションを与えたり、自信をつけたりするということである。このような癒しにとって本質的なものは、量的な研究を通して測定されるものではなく、質的な方法により、患者の側から何が起きているのかをとらえ、全体像をつかむことができる。」と述べられた。質的な研究は、新しい知識を生み出す価値のあるものであり、方法としてますます認められるようになってきている。量的な研究に代わるものではないが、コービン先生が「グラウンデッド・セオリーの手技や技術は、定性的データの分析に適しているだけでなく、定量調査の一部として使うことにも可能である。」と述べられたように、人間の現象を理解する重要な手段として位置づけられるべき手法であると考える。

質的研究の方法論には様々なものがあり、研究者は、様々な方法論から選択ができ、また方法論を組み合わせ、その要素をとることができる。しかし、どのような方法を用いるにしても、質的研究にはトレーニングが必須であり、「必ず経験のある研究者からアドバイスを受たり、サジェスションを受たりということが大切になってくる」と述べられたことが印象的であった。質的研究の方法論は、明確な理念を持っており、それらを十分に理解しないまま、技術的側面のみを活用しようとするのは大きな誤りであり、研

究者自身が確実にその方法論について学習することはもちろんであるが、これらの方法論をきちんと使用できる指導者を通してきちん学ぶことが重要であると感じた。質的研究の指導者の養成と確保が求められている。

5. おわりに

講演の内容をもとにグラウンデッド・セオリーについてまとめさせていただいた。著者の浅学のため十分言い表せない部分も多々あることを承知しているがご容赦いただきたい。コービン先生が、「グラウンデッド・セオリーは、たいへんな仕事ではあるが、努力する価値があり、また楽しいプロセスでもある。発見の喜びほどエキサイティングなことはない。」と述べられたことが、看護の質的研究を行おうとしている看護職に大きな力を与えてくださったと思う。

著者連絡先

〒 870-1201
大分県大分郡野津原町廻栖野 2944-9
大分県立看護科学大学 保健管理科学研究室
桜井 礼子
sakurai@oita-nhs.ac.jp